

南洋の孤島 玉碎寸前の生き残り

山形県 阿部 清次郎

「阿部さんは海軍の主計だと聞いていますが、南方勤務でしたか。」

私は大正十年八月、山形県の河北町で生れたが、志願でなく徴兵で海軍となり、昭和十七年九月に舞鶴海兵団に入団です。六ヵ月基本教育を受けた後、東京築地の海軍経理学校に入って主計課を卒業しました。

昭和十八年後半になって、帝国海軍は、ソロモンやマーシャル諸島でも米軍に押され、各地に空襲が多くなっていきました。その頃私は日本郵船の徴用船に乗り、台湾からサイパン島を経由して、マーシャル群島のタラワに行った。船は引き返す途中、左舷後部に魚雷を受けてしまった。

船長は巧みな操舵をして危険な海域を脱出して、マロエラップ島に乗り上げ座礁することが出来た。私は

船長とか指揮官の冷静な判断に感心しました。この島には海軍第六十三警備隊がいて、裸で上陸した私達はその警備隊に入ったのです。昭和十九年二月でした。四月頃敵が北上するというニュースがあり、その頃からグラマン機での空襲で徹底的にやられました。毎日定期的に来るのです。

警備隊の司令官は鎌田少将で、人情味豊かな人だった。陸軍部隊は中西部隊で、士気旺盛、軍紀厳正で島の警備に当たっていたが隊長は終戦の時に自決された。

日本の零戦は最初、アメリカのグラマンに勝っていたけれど、数の前に逐次押されてきて、しまいには零戦はいなくなり、連絡の赤トンボ機ぐらいになってしまい情けなかった。

その頃、第六根拠地隊が玉碎したぐらいなので、戦闘は物凄かった。私は主計兵だったので、戦闘に直接かかわらなかつたが、主計長から食料、衣料、物資の分散を命ぜられた。

島は小さかったので必死にやった。米はドラム缶に

詰め直したが、その場を爆弾に直撃され、林の中も全部やられてしまったので、砂だらけの物をかき集めた。

隣の島は玉砕したクエゼリン島だった。水陸両用戦車を初めて見たが、最初は判らなかつた。一二キロ位先のクエゼリンの海岸に向かって黒い粒がポツポツと浮いている。

「あれは何だ」と言っているうちに「上陸用舟艇だろう」と思ったら海岸に止まらずにドンドン陸に走り上がっていくので「水陸両用戦車だ」と叫び声があがった。目茶苦茶にやられているのを目の当たりに見て、次はこちらだと、全員武装整列し司令が命令を下している。

私は列外にいたが不思議な音が付いた。隊列から「カチャカチャ」という音がしてくる。なんだろうと思っていると司令が「みんな武者ぶるいしている」と言う。

〔解説〕タラワ、マキンに機動部隊が来襲し始めたのは昭和十八年九月十八日であり、十一月二十一日上陸、十一月二十五日玉砕である。クエゼリン上

陸は十九年二月一日であり、二月五日玉砕となっている。

敵前上陸を眼前に見、玉砕を予期し、明日は我が身と思えば我々も震えてくる。恐ろしいのと、何くそと緊張して震えるものだから隣の兵隊の軍服にすれて「きぬずれ」音と、兵器の震える音が「カチャカチャ」と聞こえるのです。不思議な音がするものなんです。マロエラップ島に米軍は上陸しなかつたのですか。

クエゼリンもオットも数日間で玉砕してしまったのですが、連合軍は直接上陸せず、空海からの攻撃だけで、蛙跳びというのですか、途中の我々は封鎖され、食糧攻め、餓死で自然消滅させる作戦だったようです。当時我々の部隊は兵員が二八〇名程いた。島には海軍航空隊もいたが、戦闘員より我々は難儀をした。飛んで行けないのだから、直接戦闘よりひどい。空襲などの戦死、栄養失調で戦没し百名ぐらいになってしまった。

栄養失調になると水ぶくれになる。関節が固まり歩

行困難になると倒れた所の砂を、最後には無意識のうちに喰って駄目になる。平林大尉は、砂を喰わせぬように、食べられる物と食えないものを区別しろというが、無理なことだった。

爆撃の連続で緑の物も少なくなる。私は農業学校も出ていて、農業体験もあるからと、農園長にさせられた。ところが、地面が緑色になるとそこを爆撃し、農園を無茶苦茶にしてしまう。米軍は我々を徹底的に食糧攻めにしたのです。

昭和二十年一月に入ったら豪州のメルボルンから逆宣伝が入って来る「日本の兵隊さん。日本はもう駄目です。国では親や子供があなたの帰りを待っています。一日も早く降伏しなさい」と無練でも入って来るし、飛行機が低空で飛行しながら、拡声器で日本語で呼びかけてくる。日本の流行歌を流したり、靖国神社を描いたピラを盛んに撒いてきました。我々は一笑に付していたのですが、敵もこれでは効果が上がらぬと見たのか、土の中に埋めた食糧貯蔵場を「しらみつぶし」に爆撃しはじめたのです。判るはずがないと思ってい

たのだが、恐らく島民のカナカ族が秘そかに通報していたのではないですか。

通信機も駄目になり連絡もとれない。潜水艦が来て食糧を補給するという噂もあったがつかいに来なかった。逆に、投降をすすめる宣伝ピラに応じて夜間ひそかに海岸へ出て、泳いで敵の潜水艦に拾い上げられ、我々に投降を呼びかけた者もいました。

その頃になると、指揮系統がなくなり、大発に乗って他島へ後退しようとして相談し海へ出たが、銃撃され船に穴が開いてしまった。穴に木の栓をして、玉砕したオロットまで行った。そこも人がいなくなり、椰子や椰子酒などがあるが食糧は無い。

先にも話をしたように、戦いは弾でなく食糧となった。栄養失調で砂を食べて胃をやられるんです。あれが地獄ですよ、丈夫な者が死体を、爆撃の合間に埋める。そのうち暑いものだから白骨化して、誰だか判らなくなるので認識票でやっと名前を知った。

中には半分白骨になっている者もあるので、遺体を並べて焼くんです。二〇人並べて油をかけて、その上

に鉄板をかぶせて焼くんです。夜その不審番に立ったんですが、錯覚なんです。焼けるに従って骨が立ち上がるような気がして、びっくりしたことがあります。

故郷で死ねば親兄弟や妻子が弔ってくれるが、南の孤島では鳥も啼いてくれない。成仏できない怨がこもって骨が立ち上がるような錯覚をするんですね。何とも悲惨な戦いだった。離島で戦った人は孤立無援で、何処へも行けないで死んでいくと皆言いますね。大陸や、インドネシアの大きな島なら、何とか救いの可能性があるが、食糧が無い、僅かに珊瑚礁の引潮の時魚介を取ることぐらいだった。

昭和二十年八月頃、敵の飛行機が缶詰を落してくる。始めは「毒が入っているかも知れないから喰うな」と警戒していたが、何しろ腹が空いているから、どうせ死ぬなら毒でもよいからと、一人喰い、二人喰い「これはうまい、大丈夫だ」というので、それから投下食糧を待ち望むようになりました。

九月頃、オーストラリアのメルボルンの情報があったが、日本からの連絡は九月十日頃だった。日本は兵

器も食糧もないので「あなたたちは負けました」と知らせてきた。大本営からの終戦連絡は十月初めやっと来た」と記憶しています。

米軍のH・Bグロウ大佐がフリゲート艦で入って来て、棧橋に軍艦旗を立てているのを下して、星条旗を掲げられ、悔しい思いをした。島の占領宣言は、二本のポールを立てて、一本に日の丸を掲げ、米軍軍楽隊が「君が代」を吹奏する間に日章旗を降下させると、代わって片方のポールに星条旗が、米国歌吹奏とともにスルスル揚げられた。これで日本の敗北を皆に知らせた。

武装解除も同時にやられた。将校は紳士的で日本語も話せ、さすがと思った。

十二月に入った頃か、米軍のフリゲート艦が来て、「貴方を復員させるがどうか」という。第六特別根拠地隊司令の鎌田少将は「死ぬことのみが御奉公でない」と我々に訓示したが、司令官はその場で戦犯として護送され、みじめだった。

フリゲート艦でクエゼリン島まで送られ、パラオで

は日本海軍生き残りの空母「鳳翔」に乗ったが、甲板がやられていた。十二月浦賀港に着き、久里浜で上陸、D D Tを体中吹きかけられ、玉碎生き残りは早く復員出来た。

浦賀に帰って、日本の子供が小さいのに啞然としたが、石をぶっつけた子供もいた。一時、工機学校に収容され、小麦御飯を赤いので赤飯かと間違えたりし、上野駅で乗り換えの時は、機関車の前や、窓からの乗降だった。

街は瓦礫の山だし、その中で南瓜が植えてあったが、上野駅では食糧を盗まれた。十二月の寒さでマントをかぶっていたが、そのマントも盗まれた。今でも思うことは、負ける戦いはするものではない。生きるには食物が第一だ。しかし、現在は食糧を大切にせず、有り余る生活をしていて、もったいない。

一生忘れられないことは、あの戦いは、飢餓との戦いで、栄養失調は地獄そのものだ。孤島だから逃げられぬ。泳いでも逃げられぬ。私も日本に一番近い島の突端で一人で泣いた。泣くと戦いも恐怖は無くなる。

爆弾でもなんでも泣くと心が落ち着いた。爆弾が落ちてきたら、逆に向かっていけば、逆に運が開けていくという経験をしました。

この戦争体験の労苦を通して二度と戦争のない永遠の平和を祈念し、余生を平和に貢献できますことを希求してやみません。